

Q：現在、中国の多くの園長先生は、幼児体育授業の目的が単にスキルを学び、身体を鍛えることだけだと考えており、本当に頭が痛い問題です。このような誤った理念に対して、私はどう対処すればよいのでしょうか？ 幼児の体育授業とは、あそびを通して子どもを運動させることではないのでしょうか？ 一つの幼児体育授業の目標設定は、ただ身体を鍛え、スキルを習得させることだけなのでしょうか？本当に頭が痛いです……。 (中国幼児体育指導者)

A：先生のお悩み、よく理解できます。幼児体育を「運動スキルの習得」「体力の強化」といった狭い目的に矮小化してしまう考えはしばしば見られます。ですが、幼児体育の本質はもっと広く、深いものです。幼児体育授業の本来の目的は、①「動ける身体」だけではなく、「動きたくなる心」を育てることが大切です。技能や体力は大切ですが、幼児が自ら楽しんで身体を動かす態度や習慣をつくることこそが基盤です。②社会性・感情・認知の発達において、あそびの中で「順番を待つ」「協力する」「工夫する」等の学びがあり、これも体育の重要な教育的成果です。③生活リズムや健康の基礎づくり、外での活動は、睡眠・食欲・排便リズムを整え、全体的な健康生活を支えます。

「あそび」を通した体育の意味を考えてみますと、幼児にとっては「運動あそび」が自然な学習方法であり、走る・跳ぶ・投げる等をゲームやあそびの形で体験することで、楽しくくり返しながらか技能も育まれます。「教える」より「環境をデザインする」ことが、指導者の役割となります。成功体験や工夫する余地を残したあそび環境を設定することが大切です。

誤った理念への対処として、①国際的な研究や指針を示します。WHO や OECD の幼児教育の資料では、身体活動は「認知・情緒・社会性と一体的に育つ」と強調されています。エビデンスを用いて説明すると説得力が増します。②園長先生に「全人的発達」という視点を伝えます。単なる筋力や技能習得だけではなく、生活力・自己調整力・対人関係の基盤づくりにつながることを具体的に説明します。③授業実践を見せます。単純な「走る練習」よりも、追いかっこやボールあそびで子どもたちが笑顔で力を発揮する姿を示すと、「これも体育の成果なのか」と理解が広がります。

目標設定を「多面的」にします。例えば、1回の授業で、からだを大きく動かす経験（体力・技能）、友だちと関わる経験（社会性）、成功や工夫の喜び（意欲・情緒）を同時にねらうように設計すると伝えると誤解が解けやすいです。

先生が抱えておられる「頭が痛い問題」は、まさに幼児体育の価値を広めていく上で避けて通れない課題です。しかし、誤解されている分だけ、正しい理念を共有できたときのインパクトは大きいはずです。園長先生方も「子どものために何が最善か」を考えている点では同じ立場です。そこで対立ではなく、「子どもの笑顔と健やかな育ちをいっしょに実現する仲間」として対話することが有効です。

先生が、次に園長先生方へ説明される場があれば、私は「幼児体育＝スキル習得ではなく、あそびを通した全人的な成長支援」という三本柱（身体・心・社会性）を強調した話の内容にされると良いでしょう。

幼児体育授業の本当の目的

「からだを鍛える」だけではなく、「心と社会性」も育てます。

1. よくある誤解

- 体育＝スキルを教えること
- 体育＝体力を鍛えること
- 体育＝「運動選手を育てる」こと

2. 本来の幼児体育の目標

幼児期の体育は、「全人的発達」のためにあります。

- 身体面：からだを動かす喜びを知り、基礎的な動きを身につけます。
- 心の面：達成感や工夫・挑戦を通じて、意欲と自信を育てます。
- 社会性：友だちとの関わり（順番を待つ・協力・ルールを守る）を学びます。
- 健康生活：睡眠・食欲・排便などの生活リズムを整える基盤になります。

3. 「あそび」を通した体育の意義

子どもは「あそび」の中で自然に動き、くり返し挑戦できます。また、遊びながら、技能も体力も育ちます。笑顔でからだを動かすことが、「運動習慣」につながっていきます。

4. 授業目標の例（1回の授業）

走る・跳ぶ・投げる等の動きを経験します。友だちと協力・競い合う楽しさを味わいます。「できた！」という達成感や工夫する力を育てます。

5. 園長先生へのメッセージ

幼児体育は、「からだを動かす学び」を通じて、子どもの からだ・心・社会性 を同時に育てます。つまり、体育＝未来を生きる力を育む教育活動 です。

（前橋 明）